



官
剝
孝
義
錄

卷
十
六

陸
奧
五

9
1596
16



うけいさむとびのせきか町ありしちちふら園の
 やうのりてありに招くまはのゆりて父は信りしりや父
 長と信りしりていづつら個一もめぬ又安史の信り
 せりしり何事とて申すまはのゆりて信りて
 食ひ父のこころ小言飯を信りて湯茶もさちめやう
 く暇様の教ひまはのゆりて信りていづつら
 あり途中よ物うん申ありてとまはのゆりて
 してまらうられしゆをもさちまはのゆりて
 一人あまのこまはのゆりて信りて信りて
 又父の信りて食ひ父親しき友のゆりて信りて

食時をとなれいひもくも不無るらんといふ徳り
 湯漬飯をとりて携へ行けりかこのころ篤実の
 のみく安史の信後もさちまはのゆりて信りて
 場をら申ありしり信りて信りて信りて
 信りて信りて信りて信りて信りて信りて
 信りて信りて信りて信りて信りて信りて
 信りて信りて信りて信りて信りて信りて
 領主の金とありて信りて信りて信りて

貞節者あり

あふら信りて信りて信りて信りて信りて信りて

若七の妻として扱はれし貞婦のきこえあり若七の代々
 傳ゆをいふ世に成りしゆれたりけ妻十八歳なりけ
 け妻はまよりし二車にこゝろ若七を病とせし治を
 してこゝろをさうりせられたるや父母は五年りしるを
 憐れかりけよりぬあつし人よせし治はしりし
 後よりしてあり父母と恨らるもあらしんと服を
 てるはわへ年家やうしつりよふは一度丈夫ぬと
 なるも又病に苦しむるもしつりよふは二婚に
 來りし初は家も富りしに夫病の後いつとむく
 病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし

出んたるありしに病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 つとそし人病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 をいふは病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 茶席にわたりしに病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 といふは病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 疾美那といふ病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 折ありて斗帳に人よせし治はしりし
 といふは病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 教給りていふ病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし
 といふは病に苦しむるもあつし人よせし治はしりし

けよふけする魚肉とも加へて食ふはとて此見の如きを
 盤ゆり申すものもとて方此芳若と厭ふる事と
 しとあらぬと是も嫂の如しの如き事と云ふに列する
 によせりとて寛延三年十二月領主より此若若
 妻を養育しとて金急子とありていふ

孝行忠長者

長者は東田郡三三村の百姓といふこと二斗てあり
 のちから長お希うふたうと家養いこといふり長者
 う守奉り時々の人の病よけりてよき事とて母の病よ
 うりて寛延二年の秋病にゆり同と三年十月より

父と病氣を患へて身つてて強き二親ともよく
 けれこのうとゆかりたは六歳も及ぶ事とする事と長者
 いまこ八歳よりいふらう各事に入らるなり 松成々
 枯枝をとり村田町へお行儀よ入て芝野のりうたと
 かひく心心を親族又と組合のゆれも長者志を感
 し兼穀をとりいれいふ事ふれかるとき久しく二親の
 似をこのをいふとかくせうら母の病は快くさりし
 子細やより離別せり父の病つてはけのう病病も
 重うとと年うら我んも是事なりと然りてとて力
 とていふかくねさるばいりあはまをむくころわらう

へくたくと比のさうやれ結りてふふのむむとくくも
慰めける身は海にふおもるはけしむに父はあふまゝに成
志のく海をさしむく登のよらよ暮とあふふひく
そらうにふさせ新とさうを夜立とも電よ火の
後めやうふささのゆらまを光葉もふれそ
ゆふく日といふくふく入らと炭をさうとまよそよ
ゆ味味ゆ豆磨のうらとともの入のゆう飲食のうも
父のよまはひくくくくくくくくくくくくくくくく
まなまの別よあまの葉まなくさうて静とくくく
のくくく會くくくくくくくくくくくくくくくく

想りして長らくを聖佛地ふくく通わら者いん
はく妖怪もやあんとくゆれもくまをさうくまを
身れふをまをくくくくくくくくくくくくくくく
静ふくくくあまの葉はひ居らとま生村乃龍寺
乃傍えんやしくくくくくくくくくくくくくく
いふおと向へま父の病りあ母を離別やまゆくまは
もつらゆら平つてはわらうくくくくくくくくく
あままて寺ままはまあふんとくくはひる二里まハ
うのれをさくくく寺ふりてくくまあまとのひて候
ひゆまうくく報とてうくく嶽やうれりの父はひ

けくふよ南をそれち人携りけしと又米二升よ味喰
 ともあえらとてう長吉十歳よまのくね乃折枝
 するうけら、黄板を村田町へ置子よ宿にれ所を
 へて四夜をて一二夜つ背向ひのれ可手く日毎よ
 二度僅まやう南を夏に知花のく製丁らとあし宿
 くれ行とてく暇をくせれして父をきりするゆれ
 ありしとき若うふおと人もお父よ僕をたたくあり
 へ家の古れともあつらふものあれとらうこさく父よ
 きとらう土果よぬとてくいりあく孝心高くけく
 父乃高も快くうく父子向く業とつてむ里の

りれとも若う志小りてく父う抱るうりあち那役ハ若
 くとありまあれと僕ハ田地ハ人ようけ作させく
 公納意のめくれとれ他徳のいさうをれと若う
 かに人と志をあもせく物らとの多うのけつと宝曆
 二年辰まうの金とてくはあえ人あると意り
 ちうく孝志せよとてつをを記してとあん

貞節者文六妻

江刺郡高寺村の百姓よこの女十九歳とて此文ある
 りれあう父うせく後絶文入く母に貞せくう是も
 後ろく死やう文六う妻と十七歳のとてけあへ嫁く

事のうに継父をよむ姑小ははくして居るくうに継父
 かくりてはに何れも姑のひびよ志しつるるもはし
 文六世妻をゆへりてくうに種うく瘧病を患ふま
 しく中めと人のかたうと瘧病をさうしてつゆい
 うちおまはる衣履もたのくを賣拂ひ兼用とせ
 三年にほくく重りゆれんくあくさちぬよふれ
 ふと妻らかしも歸じ意をくくつてくうに月代を
 おひふもおしんく人もふけきハ刺刀とらあひて
 けくううで農事も姑と心を合せく田畑もあふ
 小姑のもあうく具ももま一人して指さくといふ人

てお骨とておといひの娘難といふはくうと先を
 二人お骨のやうにさくく一人の切をくうもあ
 夫は及日てく小農業れをぬをくうたせおまうも
 姑吏乃託居といひを異の障をさやうにけく飲食を
 姑まの白むのめくうめをさくして求出てくひ日
 雇小めけくをさくく味のおめれくくおの
 料をくのくうに驚くくうて姑吏もす先くうに日後
 のうらくくく別は嫁入を姑よ取くくおまはく
 くる行めくくくくくくくくくくくくくくくくく
 志くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

祥へけきせんとすく形別は修入重く業礼の料と
 あまの昔に女の道正へ新奉業礼乃物入を西人
 姑の申候へあつても好まらうとらむへ出らる
 申あつらひ其の病をいふの事とせり室曆
 二年十二月願まうり賞へて金あり入事なりとて

奇物史(津波)

津波史、黒川郡志戸田村津波村森盛村戸田村戸田村の
 所業あり先祖より代々世及とつてしうの二百卒
 氏余らうりはしつていふ事な思よりつて二十七年
 公勢とまへんつりもく村の難民を救ふとてつ小

ち候へ思ひ入らむと人々感服して津海もふつりけり
 年之くくはあつりの田畑熟せつて人々も豊穡
 となりしとて津波の事も豊つらつねとておのれの換
 差へりつて次村内乃事れとておのれを助るを救
 却りて難民ありとておのれを助るつて死つ
 かせ候りつらあつりて老よ八年の法よりつて津味時
 と増りて或は妻をたぢりてつて月達もらつたよ八金を
 かりあつてつて儀をいふとて馬飼入料よえつて
 ぬも同つてあつてあつておのれ僕つておのれつて
 ぬもも人々難民もつらつらつて津浪をいふ

りつらけせとせなまはる信とをせしまどはらりの救多
 ありきり一の用ありあ村の者まきとる會事此時と
 日小ゆくりむは吐き其用とをむ一村中連名の文書
 なるよ官判とて平らふと我輩よのち招きこくま
 きのり方ありん事と思ひりとなり小所業と唱ふ
 ぶののい定られとる事よはれはとる西人招きま
 地よつても其家よりぬれり我方とてを便まらる
 めつり農事此始ありとて始ありとてあり志戸
 田澤波の二村と用水よま一は地よりとせなまはる
 ありとてはる新境とつとなく大堰を築とせし二村を

水利を始り又貧民のうら人死とらるゆりて葬送
 するき力もあらはる助かりとておれと調へり大病の老
 ありあ人参利うへは料なけしは是ともなりをあら
 富谷村乃権左衛門とてふりの親又孝ありとてさる
 とてつれりのふる徳ありとてさる領主より其名
 を賞して徳ありとてさる又後とも徳ありとて
 性来乃育人あり若くとてさるたはけつる事とて
 とてさる家實とてさるて寛保二年に退役せんとて
 死ひ出つる村は民惜とありとて母子講とてありと
 結んでせなまはる事ありとてはる村のりありとて

海にせよ金二十ある八年にまゝなりかたへまゝなり
 領主の役なりとしかく後く引つゝ勤まらけせ六氏
 平ふよありあつゝまゝなりとありかたへまゝなり
 海に生れつゝまゝなり父母孝行をうけ父乃病中
 りまゝなりふむを病の醫師より日たを此害神をも使
 してはむりかたへまゝなりとありまゝなり
 ことひよりくまゝなりまゝなり病入につまこと
 是の妻よりまゝなり他人のまゝなりまゝなり
 妻懐妊して女子生れまゝなり父の病をまゝなり
 婦よりかたへまゝなり父と母抱くまゝなり

感あり父をまゝなり毎まゝなり孝義のむ
 まゝなり烟系れまゝなりおれは胡とふ先祖乃位牌とゆせり
 まゝなり酒つまゝなり酒を飲つゝ公用つゝ
 酒の酒好まゝなりおれは酒を飲つゝ
 酒よ懐くまゝなり父の病をまゝなり
 男女二人りまゝなり父の病をまゝなり
 小更由も礼儀正しく村乃申れ凡俗もまゝなり
 月まゝなり宝曆四年三月領主よりまゝなり
 せつとまゝなり

孝義録者はま

娘もあつて人よくとつてうけ給ひぬきてを伺ふ
 とまじきたふさぬよりのあちて実を報親のこころ
 くもあけるかゝる報お給へたる折も舅姑よのめく
 思つて孫のこゝろよくとつて身方支ぬに衛をうけ物
 すうして仇を志れと迎里の者共姑よのめくこころ
 好乃こころえ姑よのめくお給へたる友と友と
 湯をこゝろも養風をけりて寒さの頃とて湯をこゝろ
 とのりてあつて先をぬきにゆめを養飯をこゝろ
 娘またりて女をうけりてあつて湯をこゝろ舅姑の用を
 侍へるふさあつてこころよくお給へたる友にこゝろ先

姑をおもて身もつと活のり給へるにこゝろ
 是れを病のこゝろお給へるにこゝろ
 けりてうけりてきかく夫婦のこゝろ
 さうして居る年乃わといお給へるにこゝろ
 一人おてはる先乃親里よと正月乃親七月の墓
 ちうとあつて申さくお給へる日及迎隣へて名以り
 父母のこゝろたのめて出必お給へるにこゝろ
 と舅につて申さく又志りやう若ふ申さく活へて
 しく成り父母乃衣服もけりて御へて切と換へて
 ときふはる親里よのち申さく衣服をけりて

高孝公深く切らうし時をうきかた父母の言よとじこ
 く事あり田畑ノ業はまじりもすし此後休むれ
 目をもじりく世狭山乃りてまじりなとやの又ハ魚と
 けの薪と拾ひて家に入り食物ハ皆父母よをりゆり
 あれとけへむく事むもくもせりりこをハ十九日奉こ
 して父母ハ喜ひしは主人の家よりハ九町もまを
 主用乃りぬあれハ風雨大雪ハ厭むる一夜二枚毎
 ぬてハ父母ハ悔むえ何ゆとて又もめりひく芳とこ
 すけ主家にあるおと繩をちひけ入をて米穀魚の
 類より人回つて先の者たら莫と買く肉たら事

あれを其月此分ハあさらけきまきぬく父母よ後れ
 兼成とくハはるむり付と一極う穂の稲穂よても皆
 けへ金かくもとも父母乃れよけり主用よりハ山へけ
 小焼飯二はとけとあへんらけとつと一けちうて反
 ちり料こもさけと奈ハもか父母よすし四季施せと
 主人より一年に木綿二疋つらふらりあること
 くも父母よきせとれ乃ハる小横指とつり此さく
 けうてりらる主用ありて他人出らよハ子く指らる
 りのをれとるらりて衣夜垢つとくも母の泣ひとく
 きくあれハつとと合せておと後ハ主人も其

志は感く米穀をとりて之を夜ふり又とちり
 親族の者と喰ひつゝ先づと貴く金一分とてを
 と私倉庫に置ふ主人の方に頼り主人にうゝ利益を
 二とちり人長くお祝へ孝義此をよけとちり
 中とと大行葉まき主人より病く坐し病し
 つゆ主人をくみりおまを子十帛次乃代とちり
 二太やしく急りちくつと先づ又も世とちりぬ見甚
 子帛と二とちり今とく母につち金うけ後とちり
 見せかくて侍と必と心ゆかおちり病し
 慰めける母病いあれと見せうと病く病とに病て

あつた衣類も携入り食料ももつてむらにり
 くもちおそれ涙を流しとせ入り又志ぬくも用ひ
 事ありとて母人に侍りける宝曆五年の夏
 凶事ありしと見せ此甚いことおちりける二太ハ米
 穀穀すつけくも買を夜よちりておちりおちり
 うら巻れ志つけ水をも汲てゆらぬ甚く仲も折くハ
 志りやりの日六夜よりいまげく母の病入もみえ
 二人ともおちりふ法とちり秋もあれハ措席おて
 耕作のそりりともあれハ病くとも病とちり書とす
 へ金をりたふふと二太の書にあれハ人と病く

男は母の病より死にしが荒れに荒れ繩をくわす身つ
の繩をさへてとく母の家此郡役とも滞りく
はとてく八全く兄弟死者の事そのいひゆれく
より出されく同日三年正月頃より兄弟死者
へとてあてて貴くし

孝行者勲右馬

柳屋勲右馬の他墓乃城下龍宝寺門前の者なり
養父母より入る孝あり昔父ハ中年乃死より
中風となり入病若にうそハ勲右馬をぬきく比り
又ハ追おさんとていふはさうともいふはさうく

近里乃むつまの友の墓に徳也とていふ人との事
罪を謝くあま入て及いふべき教とそ〜ぬ父は病
をくありて外西乃下へ兼と〜さ上に蒲巻を
設けり志願するのいれと日下ふも後と初一夜
と〜さう〜と〜と〜といふ事あり
けれハそのらハ勲右馬の志と感〜昔父もや〜
き〜人みとわたり悦ひその妻もむ〜も明る孝
行のみより長く昔の事〜も身此喜る〜安堵せ
〜と〜いけら〜も〜終を日〜に〜物
時と父に〜し〜事〜と〜と〜と〜

勤志志 夫婦して父を地をり人裏の川をよぼひ故
 と遠く涼牛を養ふも用おさへ十六年引取り
 善文はうたぬ忘日にさうやうかき湯して肢と改ち
 しくさうの身おあらし志しかり湯するもよかり
 しくさうむしと母は志しとせむむさう小志さう
 菩提寺もけ志を感しつらと其日たね飯をもく
 しくけり善母につらさう父のけよかきさうは
 食急しけりあも味あれさうとゆつて古きと
 善母のさうもさうけりおれさうもあま
 さうも母た度あさうかき夜さの区にさうおさ

つけおれさうとけりおさつひよ白れさうもあれ
 と是どかきさうと慰め家内あれさうと涼さうと
 母の二便しあさおささ夫婦もおさつと活け
 け文のありし義絶あさささく性まや親類も
 母にさうさう今おれさうさう納金さうさう
 小は夫婦もさう里へ親類は向さうの礼儀とけり
 さうかき志しむさうさう龍寶寺さうも褒
 賞し宝曆十一年七月佐直よささ金とさう
 善行共さう助
 善く助らさう善於北方津谷村の百姓清六さう

父を極く敬うべく百姓の怒りも加へず次日村乃民
 甚く希ふ所のの流人々を救ふ事なくも
 あらぬのれをせし初と比より洋勝もこりる寺人を
 とよおししつては實にあはれいふ事なくあつたはる
 けりまはた上り業とまじり仰よほんしくあつた
 せりつはくあふ人あつたはる陽にまは父母といふ
 洋せり十五六歳れあつたはる地の家より
 母のりてあつたはる會を成おあつて父母は
 とく先文といふとあつたはる父の母の好むら
 りぬを求り得り父母のよほんくあつたはるは
 愛のれとまふとあつたはる其をたすひ必らるる代
 遂にせけつとあつたはるあつたはるは
 知文をくも親乃の言よつて事あつたはる事と愛
 と次まて父の百姓の列よも加へる事とあつたはる
 一戸の民もあつたはる事とあつたはる村より
 百姓とく家の内にもあつたはる事とあつたはる
 と清六をくもあつたはる事とあつたはる清六は
 をかへつたはる事とあつたはる事とあつたはる
 と父もつ村長もつたはる事とあつたはる父は在
 りあつたはる事とあつたはる事とあつたはる

愛のれとまふとあつたはる其をたすひ必らるる代
 遂にせけつとあつたはるあつたはるは
 知文をくも親乃の言よつて事あつたはる事と愛
 と次まて父の百姓の列よも加へる事とあつたはる
 一戸の民もあつたはる事とあつたはる村より
 百姓とく家の内にもあつたはる事とあつたはる
 と清六をくもあつたはる事とあつたはる清六は
 をかへつたはる事とあつたはる事とあつたはる
 と父もつ村長もつたはる事とあつたはる父は在
 りあつたはる事とあつたはる事とあつたはる

暑乃二節いさげく心成つる中よりとをきりては
 父母いさくを泣き出て漸ふと考たかくしく熱しく
 後父母より死てをきりて後とを思ひては何れも
 あれ冷るる物個一つもさう父母を思ふは思ふのみ
 居る事なく寂然と夜半寝るる皆いづれもさう
 踏くして泣きあやうしくさうさうあはれ死して
 歎きとさう母は年久しく病ありて是を思ふ
 お悔へ居るよ力さうの貧窮の中ゆく業もさう
 くくわねい第一佛林といふの幸也のくく
 さうあはれとさう母の病食ひくくは中

願主にあえは是と實曆十一年九月は金をとある
 二ある考は貴しき

考行者金平

金平は伊波郡上伊波村乃百姓少て高十六石
 曰斗ありとありあり家ありけり生れつと
 篤實として上と弟の親よつて人夜と小くさう父母
 乃即床を志れく快くさうせねの烟草の火さう
 て其後雨よゆれ目さじうとまらしく其音をさう
 空を比とまき乳給へといひく後農をせつと先
 よあはれとさう出るよ中かえりよつと草をさうと来て

家はくやの病のれと公とそくくろく音病して
 妻もれ子とく次父は室磨元春にせ母を曰と
 十年の死やう曰く五年の凶事のれをいすこ母の
 老ふありはありしは教乃内れものを皆本の實
 業の業とくひてつくり終へるを業業然然
 ても母もれとくおけり父母をくちりし後を業のえ
 り一ろとく乃を志つてひ業名とおひは法と
 る於砂とく一日よ香花とくかへくよ音よけ
 ちとせとせを元とゆれ又と答を怒と報とせ
 ぶとと教事あれは必父母の業よけくもれゆれ

此のいと告る事老ふく時よ果る次年貢納
 扱よつろよまて流るこくくよとてあくと全全
 のあまうりおれて組め句くを條のゆれよ信くあ
 まんて公納をわくくやすこ田に生る稲熟一
 めとハ新穀一斗を信く入て年貢の業よくして
 納りたるといふ良よあも新米すくと地既りり
 おるはぬ不熟の年ハ地既の事りて田地を捨ん
 と教事あれを全平ふく送り遠くく一
 地既もくはま免やうなるを感く後よは全平
 こと前のとあまのく免とも別をりしとこと

